

2010年3月26日(金) 18:00~21:00

会場/リクルート GINZA7ビル セミナールーム

会期/2010年3月23日(火)~4月15日(木)



霧の中で何かをつかまえようと光を当て、試行錯誤をくり返す姿勢が審査員の期待を集めた!

GRAND PRIZE

横田大輔 Daisuke Yokota

JUDGES

菊地敦己 (アートディレクター)

鈴木理策 (写真家)

竹内万里子 (写真評論家)

野口里佳 (写真作家)

町口寛 (アートディレクター)

進行: 菅沼比呂志 / ガーディアン・ガーデン
フロンティアディレクター

<五十音順、敬称略>



■出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略

横田大輔 Daisuke Yokota
「Fog」

経験を積んでいくことで記憶や思いとともに視界が霞んでいく。そんなイメージを表現するためにストロボを発光させて、霧んだ眼で見たような効果を狙って撮った。記憶と現在、イメージと現実、それらが光によって混然となった空間に魅かれて写真を撮っている。

〈質疑応答〉

- 菊地: ポートフォリオには違った表現の作品もあるが、シリーズとして意識しているのか?
- 横田: あまり意識せず、写真を撮るその時の自分の感覚で撮っている。
- 鈴木: 作品となる写真をセレクトするときの基準は何か?
- 横田: 写真を撮った時の自分のイメージを大切に選んでいる。
- 町口: ポートフォリオでは撮影後加工した作品もあるが、今回そうしなかった理由は?
- 横田: 作品の幅を広げたくて、撮影現場でストロボを発光させるという手法を試した。

ボン靖二 Bon Yasuzi
「ちょっとそとまで」

ただただつくりたいという欲望があった。デザイン専門学校に通っているが、課題制作の合間に余った材料を使って作品をつくり写真に撮って残そうとしたら、意識していない自分の「そと」が現れた。そうしてできた「そと」を写真に撮ってみると、さらに、いままで以上の作品を残したいと思うようになった。

〈質疑応答〉

- 野口: あなたにとって写真の位置づけは?
- ボン: 作品は最終的には写真で見せたい。立体物を写真に撮ると、客観的に見られる。
- 菊地: 立体物には完成の基準はあるのか?
- ボン: ない。だから写真を撮りながら、何度も立体物のカタチを変え、また撮る。
- 鈴木: 写真の撮影アングルが一定だが、立体物の見せ方にこだわりはないの?
- ボン: 自分では一応、考えて撮っているつもり。

中井菜央 Nao Nakai
「PROGESTERON」

人が生きていくことに興味があり、写真を通して人が生きている感覚を表現したいと思っている。今回の作品は女の人の人にかかわらない気持ちや感覚をテーマに、心と体の揺れを写真に撮りたいと思った。タイトルは、妊娠、出産、生理などの女性ホルモンに由来する。

〈質疑応答〉

- 町口: 女の人にしかわからない感覚を誰にわかってほしいのか?
- 中井: 男の人を含めたみんなにその感覚を写真で伝えたい。
- 菊地: 女性を撮るといった既に氾濫したテーマに回収される抵抗感はないのか?
- 中井: 抵抗はない。人のポートレートを撮ることは自分で決めているので。
- 野口: 中井さんも女性だけど、自分自身は被写体として興味はないの?
- 中井: 興味はある。次は自分と、関係の深い祖母をテーマに作品を撮ろうと思っている。

三野新 Arata Mino
「モーターサイクル・ゴー・アルファビル
~ A motorcycle goes to Alphaville ~」

映画をモチーフにした作品。批評を文字だけでなく、写真で表現できないかと考えた。さらに、クオリティに対する皆の感じ方に疑問を投げかける意味でB級感を出したかった。他の作品とともに展示される中であえてB級感を出し、考える機会を提供したいと思った。

〈質疑応答〉

- 菊地: B級感を出すことで何を壊したいの?
- 三野: "クオリティが良い" といっている人たちが制度を壊したい。
- 竹内: グランプリ個展プランを具体的に言おう?
- 三野: ある事件を立体的に表現するために、その土地特有のブリクラを使って表現したい。
- 鈴木: 現在、大学では何をやっているの? なぜ、写真を撮っているの?
- 三野: 演劇の勉強をしている。演劇が何度も再生したように、いまの瀕死の写真で何ができるか考えた。

吉田和生 Kazuo Yoshida
「月面」

複数の旅の軌跡から生まれた作品。物事の「始まり」と「終わり」を相対的な点の重なりと考えると、その点の連続の中で僕たちは生きている。忘却することは無くなることはない。光によって刻まれた感覚は体の中で点滅している。その光の点滅をこの写真で表現しようと思った。

〈質疑応答〉

- 竹内: 「月面」というタイトルの由来は?
- 吉田: 時間や空間や音の中での存在を表す言葉。有るものと無いもの中間をイメージしてつけた。
- 菊地: 展示作品は4点あるが、どれか1枚の写真だけで作品は成立するか?
- 吉田: 無理だと思う。時間の経過を表現するとき、複数の写真が必要になる。
- 町口: 展示した写真の元のモチーフは何?
- 吉田: 「桜」と「花火」と「水」と「モニター画面」を撮った。

滝沢広 Hiroshi Takizawa
「夢の出口」

タイトルの「夢の出口」というのは希望という意味を込めた。現実よりも夢の方がリアリティがある。早く夢から醒めて現実の世界でリアルな感覚を得ることが目的。そのため夢を反芻して、夢の向こう側に現実があることを願って写真を撮り、作品をつくりたい。

〈質疑応答〉

- 鈴木: 「夢」にこだわっているが、あなたが撮る写真と他の写真にどんな差があるの?
- 滝沢: 僕が思っている夢とは現実と限りなく近いもの。現実の中にも夢があると思う。
- 町口: 鹿を撮った写真が最近多いが、モチーフの中に鹿を選んだ理由は?
- 滝沢: 鹿は日常にいないので、現実の動物とは思えない感覚があるから。
- 菊地: これらの写真は既視感がある。あなたの言う「夢」と「物語」の違いは?
- 滝沢: 夢は虚構ではなく、自分の中から出てくる現実のイメージだと捉えている。

■審査員の感想、そして審議

出品者全員のプレゼンテーションが終わり、「新しい写真表現をさすための議論したい」と進行の菅沼さんが宣言し、審査員一人ひとりに感想を聞いた。鈴木さん:「写真の価値が多様化したいま、展示作品だけではジャッジできない。今回の6名の出品者はそれぞれアプローチも違うし、考えていることも違う。同じモノサシではグランプリ候補は選べないで難しい選考になる」。町口さん:「一次審査、二次審査を経て、この6名のファイナリストが残った。この間に最初のポートフォリオから作品も本人の考えも様変わりしている。この中から1名を選ぶのは本当に難しい」。野口さん:「いろんな写真表現があるので面白い。全体の傾向として断片的積み重ねの作品が目立つ」。竹内さん:「展示そのものは粗削りで、まだまだ満足できない。突出した作品がなく、審査は厳しくなると思う。出品者本人の写真を取り巻く環境への意識などもふまえてほしい」。菊地さん:「いろんなタイプの作品があるが、6人とも既にある表現のバリエーションにすぎない。形式化されていて、既視感が強く、つまらなかった。テーマの設定もありがちなものが多く、そこから先を掘り下げようとする意識が足りない」



次に出品者一人ひとりに対する感想を聞く。まず、横田さんについて。「今回の展示の中では一番魅力的だった。画作りがうまい。写真のセレクトも面白い。ただ、断片的集合から何がしっかり伝わるのかという不安もある」と野口さんが言え、「今回の作品も良いが、ポートフォリオの中にある作品も良い。この次のシリーズも気になる」と町口さん。鈴木さんは「この写真は撮影段階でストロボによって闇の中から画が現れ、プリントすると光によって画が消えていく。それらの瞬間に作者本人が立ち会っているところが面白い。自分の目指すものを写真でつかまえようとしているスピード感がある」と評価する。菊地さんは「一貫した感性があり、作品として体系化する技術がある。しかし、ダイナミズムを感じられなかった」と辛口の見解も。中井さんについて、竹内さんが「とても良いものを持っている人。自分がこう思うことを疑いながら続けてほしい。うまくまとめようとせずに、もっとワイルドにガンガン撮ってほしい」と期待を寄せる。野口さんは「写真に力があるのに、テーマによって見る人が先入観をもつで損をしている。テーマに縛られずにもっと自由に撮ると、自分が解放されると思う」とアドバイス。「強くても良い写真。女性云々というテーマは言わなくても写真が物語」とは町口さん。菊地さんも「セレクトも編集も良くないが、1枚の写真で語れているのはこの人だけ。ポートフォリオの中には、ハツとする写真がある」。吉田さんについて、鈴木さんが「ポートフォリオの構成も、プレゼンテーションも面白かった。しかし展示は作品の魅力が伝えられていない。どう評価していいのかわからない」と困惑すれば、竹内さんは「本人の考えは良くわかったが、それが展示で表現されていない。それから全員に共通しているが、何かを表現するとき自分の行為がステレオタイプになる恐れを自覚すべきだと思う」。町口さんは「この6名の中では一番何かをやってくれそうなる人。次の展開に期待したい」。ポンさんについて、野口さんが「これまでの作品を含め、活動全体が面白い。しかし今回の展示は大きく違ってしまっている。もう少しメリハリがほしい」とゆるさる指摘すると、菊地さんは「そのゆるさも好きで共感できる作品。形式を気にしないで自分の美学を追求してほしい」と応援する。竹内さんは「ちょっとそとまで」というタイトルだが、作品は自閉的で、その「うち」を「そと」を呼ぶ姿勢が面白い」。三野さんについて、竹内さんが「写真の枠からはみ出したい。この作品を見た。本気で何かをやった壊して」と期待すれば、鈴木さんも「写真の枠からはみ出したい」と応援する。もともとどこかやたらと壊れてくるところを見てみたい」と同意見。野口さんは「何かやってくれそうなる予感はあるが、この展示で判断するのは難しい」と言えば、菊地さんは「型を崩すにも技術に裏打ちされた型が必要」と手厳しい。滝沢さんについて、鈴木さんが「ポートフォリオはうまいが、展示で良い意味で裏切りがなかったのが残念」。町口さんは「写真の一点一点には強さを感じる。展示も彼なりに頑張りつつも、写真の強さは感じる。どこかで見たことのある写真」とは野口さん。菊地さんも「30歳前後の写真家では一番多いタイプの写真。技術はあるから商業写真に向いている」と既視感を指摘する。

■審査員による投票、そしてグランプリ決定

全員の感想を語っていただいたところで、各審査員にグランプリ候補を2名ずつ挙げてもらった。結果は……



菊地/横田 中井
鈴木/三野 横田
竹内/三野 吉田
野口/横田 ボン
町口/吉田 横田

これを集計すると、
横田4票/吉田2票/三野2票/中井1票/ボン1票

投票結果は横田さんが4票を集めて抜け出したが見えたが、ここで審査員の鈴木さんが「横田さんに投票したいがイチ推しは三野さんのほう」と物議を醸せば、町口さんも「横田さんにもいいが、次への期待で吉田さんも捨てがたい」と発言。すると野口さんは「横田さんが一番に推したい」と反論し、菊地さんも「新作を条件に横田さん」と横田さん派が2名。竹内さんは「これから何かをやってくれそうな期待で三野さん」と三野さん派も2名となった。ここでグランプリの行方は、横田さんと吉田さんはフラットだとする町口さんが誰を推すかで決まることに。横田さんを推す菊地さんが「横田さんの一貫した感性に期待して次の作品を見たい」と言い、横田さんを推しているもう一人、野口さんが「横田さんの作品はどんどんシンプルになってきている。一年後の展覧会を見つえたとときに次の作品に期待できる。ぜひ個展を見てみたい」と応援演説をする。改めて2人の意見を聞きながら町口さんにイチ推しを確かめると「横田大輔さん!」と発表。と同時に満員に膨れ上がった審査会場から割れんばかりの拍手が沸き起こる。横田さんが審査員3名の票を集め、見事グランプリに選出された。審査員の野口さんから横田さんに、第2回写真「1_WALL」グランプリを認めるトロフィーが授与され、公開最終審査会が終了した。

■審査会を終えて、出品者の声

横田さん: グランプリは意識していなかったのですが、票が入るにつれてドキドキしました。最後まで自分が選ばれる確信はありませんでした。一次審査から二次審査を経て今日の最終審査まで期間が長かったので、それまで意識していなかったことまで意識を向けられました。新作が条件というグランプリなので、ここで満足しないで、これから一層がんばります。

中井さん: プレゼンテーションは難しいですね。審査員の方のいろんな意見が聞けて良かったです。これからも自分なりに撮り続けます。もう一回、この場にトライします。

吉田さん: 公開審査会は勉強になりました。票が入って、出品者6人の中で自分もい勝負ができると思いました。今回、やりたかったことはできたので悔いはありません。

ボンさん: いろいろな意見を言ってもらい、自分では曖昧だった部分がスッキリしました。いい思い出になります。今後はあまり人に気を遣いすぎないように生きていきたいです。

三野さん: 実は最終審査まで残るとは思っていなかったんです。自分は、わかる人にもわかってもらえたいと思って作品をつくっているんで、今日わかってもらえてうれしかったですね。

滝沢さん: いい勉強をさせてもらったと思います。審査員の方にいろいろ言ってもらって自分の作品と向き合ういい機会になりました。これからもがんばって作品をつくってまいります。

<文中一部敬称略 取材・文/ 田尻英二>